



私は、このたびはからずも第62代の会長をお引き受けすることになったが、今日は、わが土木界にとって、大変多端な時期であると思う。この困難な時期を乗り切るために、土木技術者は、広い視野に立って、歴史的に問題を捉えることが大切であると思う。

顧みれば、わが国は、明治維新を契機に長い鎖国の夢から抜け出て、近代国家として出発したが、急速に先進国に追いつくために、軍事力の強化をはじめ、強力な官界の指導を必要とした。ところが行き過ぎとなって、今次大戦にまで発展し、これにくじけ、敗戦となった結果、占領により改革を余儀なくされたが、民主主義は完成されず中途半端な改革に終わった。その後、わが国経済は国際環境に恵まれ、低廉なる石油を豊富に消費することにより驚異的な飛躍を遂げ、その恩恵をこうむって、土木工事は、規模が拡大され、大型化した。この経済躍進は、主として能率主義の民間企業の力によって生れたものであって、行政と政治とは、発展にふさわしい近代化が、必ずしも行われなかった。今日国際情勢は大きく流動し、昨年襲った石油危機は国内に一大混乱を招き起し、インフレは進行し、その対策として公共工事が手控えられ、その上、政治不信などから住民パワーが強くなり、公共的な性格の強い土木事業は、非常な困難に直面したわけである。しかし、考えようによれば、戦後から今日までに至る順調さが、むしろ異状であって、これからの困難さが本当の戦後といつてよいのではあるまいか。

そもそも土木工事は、公共的な性格が強いのが特色である。それは、自然を改造し、国民の生活を豊かにするものであり、国民の安全と環境に直接関係があるばかりでなく、その投資が巨大で、先行的な役割を果たすため、国民経済に負担をかけるからである。

土木技術者は、土木の性格をよくわきまえ、次のような点に考えを及ぼし、心構えを新たにすることが、今日必要ではあるまいか。

(1) 土木工事は、わが国政治の実状から見てとかく政治的に利用される危険があり、総花に振る舞われると投資効率が悪く、過大に失すると国民経済を圧迫することになる。

(2) 土木工事は、一度築かれると移転が不可能で、改築が困難である。国全体の経済構造の変革を余儀なくされんとする今日、計画の見通しを誤ってはならない。

(3) わが国の土木工事は、中央集権、縦割りの色彩が強いため、相互の連繋に乏しく、中央と地方との協調に欠ける傾向がある。重要プロジェクトは、地方の開発と環境をも含めて、総合的に取りまとめることが望ましい。

(4) 土木工事は、その性格上、工事中と完成後とを問わず、大なり小なり、環境を損なうことは避けられない。しかし、環境保全と経済成長とは相反する事柄なので、両者の調和が、国民の正しい認識と同意の上で立って、計られなければならない。

(5) 異状なる住民パワーに対しては、施主がお互いに連絡を取る必要がある、ばらばらで当ることは、ますます解決を困難とする傾向がある。

(6) 近来、土木技術の発達が著しい上、福祉や環境に対する世間の注目がきびしくなり、労働力の需給が変化しつつある。土木技術者は、計画、設計、施工の各分野の密接な連繋とフィードバックが、すこぶる重要である。

(7) 開発途上国への技術援助が、ますます重要な課題となってきたが、その場合、各自が、日本国内での狭い経験をそのまま相手国に押し付けることを慎み、相手国の立場に立って、ニーズに応えるような内容の技術協力たることを心掛けなければならない。

(8) わが国は、明治維新以来の官界指導型の名残りが、とくに公共工事の場合いまだに強く残っており、施主が強権を握り、契約とその運用の点で偏務的であり、民業を圧迫している点がある。

以上のようなことを考えあわせると、今日、土木技術者は、本来の専門技術を掘り下げることがもちろん進めなければならないが、同時に、広い視野に立って、広範な知識を持つことをも要求されるので、土木学会の果すべき役割は、すこぶる大きいと思考される。

* 正会員 工博 日本国有鉄道技師長